ふるさとの祭りと年中行事　最終回

伝統行事に学ぶ「ふるさとの知恵」

調査員を委嘱されて

九十九里地方の中央に位置する横芝町には、祭礼・奉射・神楽・獅子舞など、古くから数多くの伝統的行事が伝えられてきました。しかし、近年の著しい農業情勢の変貌を受けて、ふるさとの農村生活は大きく変化し、古くからの祭りや年中行事なども衰退・消滅しつつあります。

このようなときに、町の教育委員会では貴重な民族的文化財を保護するために「横芝地方の祭りと年中行事」を調査することになり、この一年間、横芝地区の伊藤善一氏上堺地区の秋山清見氏とともに私も大総地区の調査員として、文化財審議委員の方々と協力しながら、各地区へ調査のため訪れる機会を得ました。以下、その体験を通して感じたふるさとの伝統的行事についての感想を綴ってみました。

息づくふるさとの知恵

今回、私が担当したのは大総地区ですが、牛熊・八幡神社の「お奉射」、遠山・万福寺の「安産講」、取立地方の「百万遍講」、中台・大宮神社の「梯子獅子」など、数多くの由緒ある行事を調べることができました。

現在では、すでに失われてしまった行事もありましたが、そんな中で「多分、昔はこうであったのか」と脳裏に残る芳しい行事もいくつかあります。

たとえば、木戸台地区には昭和50年頃まで「御招講」と呼ばれる行事があって、春秋二回なごやかな宴が催されていました。その起源・由緒については不明ですが、古くは地区内の農民(多くは小作農)が有力者(地主層)を酒宴に招いて、土地の貸し借りや年貢米(小作料)などを相談する「講」であったと伝えられます。

この「宴」に招待された人々は、手に手に一升ビンを携えて集まり、日常の絆(経済的主従関係)を超えて談笑しました。やがて囲炉裏をかこみ、川魚料理や新鮮な野菜汁に舌づつみを打ち、親しく膝を交えて酒を酌み交わしながら隔てのない談合がもたれました。トラクターや田植え機など、機械力のなかった時代のこと、骨の折れる野良仕事の合い間をみて、春秋二回の酒宴は当時の人々にとって待ち遠しい「講」であったに違いありません。

安産を祈る如意輪講の人々
(2月19日　谷津川畔にて)

平和にみえる私たちの郷土にも、ある時代には経済的関係に基づく主従関係や家柄による身分制度が存在していました。こうした世情の中で、木戸台の「御招講」は、一時的にせよ身分・財力による垣根を超えて、集落全体の親睦を図ってきました。ここに「ふるさとの知恵」がありそのためにこそ、村の団結が強められてきたのだと思います。

輝く未来のために

今日の農村情況をみるとき、生活面での近代化もさることながら、精神的なものの欠落には、関係者のひとりとして反省の言葉もありません。とりわけ、地域団結への礎である祭りや年中行事など、民族的行事の荒廃は、ふるさとの心の未来」を暗澹(あんたん)たるものにしております。

このたび町の教育委員会において、古来からの伝統行事の価値に注目され、消滅したものをも含めて永く後世に伝えようとする計画は、実に重要で必要性の高い事業であると考えます。その成果は、平成三年度に「ふるさと創生事業」で刊行される予定ですが、町民のひとりとして出版の日を心待ちにしています。

(調査員　実川　栄)